
ポケットモンスターmind

稲荷寿司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターmind

【Nコード】

N5338G

【作者名】

稲荷寿司

【あらすじ】

1人の少年の旅立ち。それがすべての物語の歯車を回す…。ポケモンの世界で起こるさまざまな物語を見届けてください。

序章

いつかの時代。どこかの世界。ここは不思議な世界。ポケットモンスターと呼ばれる不思議な生き物が住む世界この世界では、人間はポケットモンスター、略してポケモンと、時には協力したり、時には敵対したりして共に生きている。

そんな世界のとある場所。ジョウト地方のチヨウジタウンから南に何キロも離れた川沿いの道。今この時間は真夜中、人やポケモンはまったくいなく、明かりは月明かりだけの場所だった。

そんな場所を、1人少年が走っていた。それは学生の夏服を着ている中学生くらいの少年だった。

彼はひたすらひたすら走っていた。まるで何かから逃げているかのように。そして、それを悔やんでいるかのように。

すべてのスタートはここからだった。1人の少年の旅立ち。これが
幾多もの、さまざまな物語の幕引きとなるのだった…。

第1話：少年、イズミ

2月の末。もう少しで春になりそうだが、まだまだ寒い時期。

そんな中のジョウト地方、29番道路。ここはジョウト地方の中でも南の方だが、それでも肌寒さを感じる場所だ。

そんな場所にもかかわらず、ノースリーブ、短パン、麦藁帽子、そして虫取り網を持っている夏真っ盛りのような格好をした少年がいる。

彼は虫取り少年のエイタ。肩書きのとおり、虫ポケモンが大好きなポケモントレーナーだ。そして、エイタは今虫ポケモンを探している29番道路を歩いている。

この時期は虫ポケモンはあまり草むらを歩いてはいない。おもに木の上などで、サナギの状態になって春を待ったりしているが、彼はそのサナギを狙っているのである。サナギならば、幼虫、あるいは成虫状態の時と違い、まず素早くは動けないので、簡単に

捕獲できるからである。また、サナギ状態のポケモンは早く進化するので、即戦力としても用いることができる。春が近いこの時期ならば、より進化が早いのでなおさらだ。

ポケモントレーナーとしてはあまり強いと言える部類ではないエイタに取ってこの時期での虫ポケモン捕獲はチャンスと言える。なのでこの時期でも虫ポケモンを探しているのである。

ちなみに寒いにもかかわらず、ノースリーブ、短パンの格好をしているのは虫取り少年としてのプライドである。

「さて、どんな虫ポケモンがいるかなあ。まだ手持ちがケムツン1匹って状況は脱出したいからなあ。なんとか見つけないと……。」

などと呟きながら、29番道路の木を順番に見ている。

すると、1本の木にコクーンがいるのを見つけた。

「やった！コクーンだ！スピアーに進化してくれれば、一気に強くなれるぞ！」

もちろん、それですぐに強くなれるわけではないが、手持ちがケムツン1匹の彼にとってはかなりの助けになるのは間違いない。それゆえエイタは、まだ捕獲していないにもかかわらず浮かれて

いた。

「やったやった！……ん？」

すると、エイタはコクーンがこっちを見ているのに気づいた。

「なんだよ。もうお前はおいらに捕獲されるのは確定なんだぞ。おいらを受け入れる覚悟をしろよ。」とエイタは言った。

しかしエイタは、この時うつかりしていた。コクーンのある特徴を…。

「ん？」

そしてエイタは気づいた。コクーンがぶるぶるぶるえているのに…。そう、これは…

「し、進化…？」
である。

これがコクーンの特徴。彼らは冬の前にビードルからコクーンに進

化するが、その後はすぐにスピアーに進化せず、冬が過ぎるのを
見計らって進化するのである。
だが、もしサナギの状態で彼らの身に危険を感じたら、すぐにスピ
アーに進化するのである。

虫取り少年の間ではそれは常識の範疇だが、エイタは浮かれていて、
すっかり忘れていたのである。

「し、しまった!?!」

急いで捕獲しようとするが、時すでに遅し。もう進化を始めていた。
ぶるぶるふるえていたかと思うと、コクーンの中にも亀裂が入り、
そこからスピアーが出てきた。

「う、うわー!!」

エイタはスピアーと目があった瞬間、一目散に逃げた。当然、スピ
アーは彼を追いかけた。

「だ、誰か助けてー!!」

エイタは必死に逃げる。冬で、しかも進化仕立てなので、まだ追いつかれていないが、時間の問題である。

「あつ！！！」

すると、少し先に1人の少年が歩いているのが目に入った。学生が着る夏の制服を着ていて、片方の肩に黒いリュックをかけている。背丈が自分より明らかに上なので、エイタより年上なのがすぐにはわかった。

だが、いまのエイタにとって、それはどうでもいいことだった。エイタは彼に助けを求めた。

「た、助けてー！！スピアーに追われるんだ！！！」
と言いながら、彼に近寄った。

すると彼は、明らかにエイタに関わりたくないという感じの声で、「は？」とエイタに聞き返した。

「だから、スピアーに追いかけてらるんだってば！」
とエイタは言った。

「そんなことに俺を巻き込まないでくれ。」

と、拒絶の反応のした。

「そ、そんな…。わわっ、き、来た！」

そうこうしているうちにもうエイタにかなり近づいて来ていた。
するとエイタは彼の後ろに隠れて

「た、助けて！」と言った。

すると彼は、

「助ける義理はないが、俺が刺されるのは御免だからな。」
と言いながら、彼のベルトについているモンスターボールに手を伸ばした。

カチツと音がしてボールがベルトから外れた。そして彼は、そのボールを1〜2 m先の地面に投げつけた。
するとボムツと音を立てながらボールが開き、中からヒトカゲが出てきた。そして、

「カゲすけ！」ひのこ」！」

と言うと、ヒトカゲはたくさん小さな火を口から出した。それはスピアーに命中した。弱点である炎タイプの攻撃を受け、すぐにスピアーは逃げていった。

エイタはほつと胸をなで下ろし、

「ありがとう。助かったよ！」

と彼に言った。

すると彼は、ヒトカゲをモンスターボールに戻しながら、エイタに言った。

「別にお前を助けたわけじゃない。ただ巻き込まれた俺が刺されな
いたためだ。」
と、非常に冷めた目をエイタに向け、すぐさまスタスタと歩いて行
った。

「なんだありゃ？」

と、エイタは助けてもらったことも忘れ、額に皺の浮かべながら彼を見ていた。

「俺が他人を助けるなんてな。やっぱり俺はまだまだあまい奴だな。

」

などと、自嘲の言葉を口にしながら、彼は歩いていった。まあ彼は自主的に助けたのではなくエイタに巻き込まれたのだが。

「もう他人を助けることはしないつもりだったのにな。助けるのは、ポケモンだけと決めていたのに。なあ、カゲすけ。」

という言葉をもとにベルトについたボールに投げかけた。

そのボールの中にいるカゲすけことヒトカゲは、ゆっくりと頷いた……。

チヨウジタウンのはるか南の川沿いを走っていたのはこの少年。ヒ
トカゲを連れ、まるで人を拒絶するような雰囲気を出す少年。

その彼の名は…イズミ。

第2話：沼魚の仲間

ここはヨシノシティ。『可愛い花の香る町』と呼ばれる町である。

この町はワカバタウンやここヨシノシティから旅立つ新米トレーナーが多く立ち寄る場所である。ここにはポケモンの為のアイテムが買えるフレンドリーショップがあるため、回復アイテムを買っていくトレーナーが多い。新米トレーナーにとって回復などのアイテムは必須だからだ。

そんなこの町のポケモンセンターに1人の少年トレーナーが椅子に腰掛けていた。

彼の名はイズミ。彼もまた、これからの旅のための準備のためにこの町に来ていたのだ。そして、フレンドリーショップでの買い物を終え、今はポケモンセンターで休憩している。

その彼の肩にはヒトカゲが乗っていた。彼はヒトカゲに話しかけた。

「さて、これからどうしようか。とりあえず、この地方をゆっくりまわっていくつもりだったけど、それじゃなんか面白くないと思っ
てさ。どうしたらいいかなあ。なあカゲすけ。」

ヒトカゲはポケモンなので、人間の言葉は話せないが、鳴き声をあげ、考ているようなくさをした。それだけでもイズミは十分であった。

「まあ、そんなことは旅の途中で考えればいいことか。」

彼はカゲすけ、つまりはこのヒトカゲの頭を撫で、優しい笑みを浮かべながら言った。このことから、イズミがカゲすけをととも大切に思っていることは明らかだった。

しばらくしてイズミは立ち上がり、ポケモンセンターを出る準備を始めた。

ポケモントレーナーは旅の途中、どこで寝泊まりするかと言うとお金に余裕があったりする場合は宿やホテルに泊まるが、基本的にはみな野宿である。だが、『それこそ旅の醍醐味！』と言って、みな進んで野宿するどころか、宿やホテルに泊まる方が珍しいぐらいである。

そして彼もまた、野宿する方である。もともと、最初から宿やホテルに泊まる金自体ないのだが。

「さて、午後になる前に町を出るか…。」「
と言いながらポケモンセンターを後にした…。」

30番道路。ヨシノシティとキキョウシティをつなぐ道である。この道には多くのポケモントレーナーがいる。旅立つばかりの新米トレーナーたちが実力をここで試しているのだ。イズミはすでに何度かバトルを挑まれ、そしてすべて、接戦ではあるが勝利している。

そうしてしばらく歩いていると、大きな池が見えてきた。池の近くの木陰でいったん休もうと、彼は考えていた。

しかしそのとき、彼はあることに気づいた。池のほとりに何か青色の何かが倒れていた。

「!?!」

変に思い、走ってそれに近寄った。そして、倒れているのが何かわかった。それは……

「…………ミズゴロウ…」

だった。だが、その姿はボロボロだった。どう見ても、ポケモンの攻撃によるものじゃない傷がいたるところにあった。ただし、尻尾に入っている切れ目は体の傷とは関係ないようだ。

ミズゴロウは、息はしているが絶え絶えで誰の目から見ても危険な状態だった。そのままでしたら、確実に死んでしまっただろう。

イズミは急いでミズゴロウを抱えた。そしてヨシノシティへ走っていった。今のイズミには、野生ポケモンのためにわざわざヨシノシティに戻るのとはどうか、といった考えは全くなかった。ただミズゴロウを早く助けなければ、ということしか頭になかった。途中で休憩がてらきずぐすりを使いつつ、ヨシノシティへ急いだ…。

幸いにも池からヨシノシティまでの道はそこまで長くはなかった。30分ほどかかって、ようやくポケモンセンターにたどり着いた。ミズゴロウをポケモンセンターのポケモン回復の受け付け係に引き渡し、彼はひと安心した。しかし、彼は疑問を感じていた。野生だとしたら、池に住んでいてもおかしくはないが、なぜミズゴロウはあんなボロボロの姿で倒れていたのだろうか？しかも明らかにポケモ

ンの攻撃ではない傷を負っていた。おそらく人間によるものだろう。だとしたらなぜミスゴロウをあんなに攻撃したのだろうか？

イズミがそう考えていると、ポケモンセンターの椅子が置いてある方から、醜悪な笑い声が聞こえてきた。思わず振り向くと、そこにはピアスがついていたり、金髪だったりする不良と呼ぶにふさわしいのが3人いた。

周りにいる人たちは、明らか迷惑そうだった。

不良たちは笑いながら何か話していた。イズミは不良たちを無視しようとして決めていた。しかし、不良たちの会話から『ミスゴロウ』という言葉が聞こえ、イズミは思わず不良たちの会話が聞こえる位置に移動した。

「いや〜しかし、さっきは楽しかったなあ。」

「ああ、たくさん殴って爽快な気分だぜ！」

「あのミスゴロウどうなったかな？あいつ、オレたちに向かってきたよな！」

「さあ、死んだんじゃない？」

「ハハハッ！そいつはいいや！哀れだねえ。ハッハッハッ！」

そう聞こえてきた。

イズミは歯をギリギリ鳴らして拳を思い切り握り、今すぐにも飛びかかりそうなのをかるうじてこらえていた。

あんな奴ら今すぐにも殴りつけたい！カゲすけの力で焼き尽くしたいくらいだ！

そう考えたが、相手は3人でこっちは1人。つつこむ方が野暮つてものだ。彼の冷静な部分がそう考え、彼をなんとか止めていた。

少しして、不良たちがポケモンセンターから出て行った。不良たちが見えなくなると、辺りからは安堵のため息がいたるところから漏れた。

イズミは奴らを追いかけてようかとも考えたが、ミスゴロウの事が気になってやめた。

ポケモンセンターの受け付けの係員にミスゴロウについて尋ねた。すると、

「とりあえず大丈夫ですよ。もう意識は戻りましたし、1日ほどでこちらで直すことができますよ。」と答えた。

イズミはほっと胸をなで下ろし

「そうですね、良かった。」と言った。

すると係員が、

「ええ、これでまたいっしょに旅ができますよ。」と言った。

その言葉に

「ん？」と思い、

「どういうことですか」と聞くと、

「ですから、またミスゴロウと旅ができるってことですよ。」と言った。

その言葉に思わず

「えっ!?!」と言った。

ミスゴロウは野生ポケモンであって、イズミの手持ちではない。しかし、係員はミスゴロウを彼の手持ちと勘違いしているのだ。急いで否定しようとする、係員は裏方に呼ばれていなくなってしまった。

「どうしようかなあ…」とイズミは悩んだ。

このままだとホントに自分の手持ちになってしまっだろう、おそらく否定しても聞かないだろうと考え、ミスゴロウをひきとったあとに野生に返すことにした。

彼は実は、ずっとカゲすけだけで旅をしようと考えていたのだ。それゆえ、ミスゴロウを手持ちにする気はなかった。

だが、別にこのまま去ってしまってもいいのにそうしないのは、それが嫌だったからだ。助けた以上は最後まで見届けるべきと考えたからだ。

そうして、彼は次の日になるまで待った…。

翌日。彼はミスゴロウをひきとった。多少ためらいがあったが、ミスゴロウをモンスターボールに入れ、30番道路の池を目指した。

池までの途中、ミスゴロウを入れたボールがカタカタ揺れていた。ボールの中に入っているのが嫌なのか池に行きたくないのか分からなかったが、ボールから出たがっているのがわかった…。

ようやく30番道路の池にたどり着いた。そして、モンスターボールを開き、ミスゴロウを出した。ボールから飛び出したミスゴロウは、ピョンと飛んでイズミから少し離れた。このまま池に帰っていくだろうと思い、くるっと後ろを向き、旅を続けようとした。

しかし、ミスゴロウは『ゴロツ』と鳴いたかと思うと、イズミに近寄った。近寄った気配を感じ、後ろを振り向くと、イズミの視界は青色に広がった。…青色？。

「わわわっ!」

イズミは驚いて倒れてしまった。驚くのも無理はない。ミスゴロウがいきなりイズミの顔に飛びついてきたのだ。

「お、おいおいおい! い、いったい…!」などと言っていると、イズミはミスゴロウが顔をスリスリとしているのに気づいた。

「これはもしかして…。」

…なつかれてる? どうやら、助けたのが俺と分かっているようだ。

イズミは少しして、ミスゴロウに聞いた。

「お前…、もしかして俺について行く気なのか?」

ミスゴロウはコクンと頷いた。

「……………」

どうしようか悩んだ。

カゲすけだけで旅をしようと決めていた。しかしこのミスゴロウは自分になつてくれている。それなら…

連れて行って…こつか？

などいろいろ考えていると、急にミスゴロウはイズミから離れ、ある一方向を見ながら身構えた。

「?どうした？」

そう聞いて、ミスゴロウの見ている方向を見た。その先には…昨日ポケモンセンターにいた不良たちだった。

「あいつら…」

思わず、手を強く握り締めた。手をポキポキ鳴らしたり、辺りを見渡しているのを見て、また”獲物”を探しているのがすぐに分かったからだ。

するとイズミは、ミスゴロウがついついとイズミの服を引っ張っているのに気づいた。

「?どうした？」

と聞くと、ミスゴロウはイズミの目を見て、その後不良たちを見た。鋭い眼まなこで。この行動でイズミはミスゴロウが何を伝えたいかが分か

った。それは…

「奴らに仕返しをしたい…ってことか？」

と聞くとミズゴロウはコクンと頷いた。そのミズゴロウの目を見ると燃えていた。水タイプだが。

その強い意志に圧倒された。そして、

「分かった」と頷いた。そして、今瞬時に考えた作戦で、奴らへ仕返しをすることにした…。

「さあて、今日はどんな獲物があるかな？」

「早くやりたいぜ！」

「まあ慌てるな。慌てないほうが早くできるぞ。」

と不良たちが話していた。すると、目の前にミズゴロウが表れた。よく見ると、尻尾に切れ目が入っていた。そこから彼らは、そのミ

ズゴロウは昨日ボコボコにしたやつと気づいた。

「兄貴、あいつは昨日のミスゴロウじゃないですか？」

「ああ、あの尻尾の切れ目は間違いないねえ。どうやら、生きてたみたいですね。」

「そいつはいいねえ。昨日はオレたちに刃向かってきやがったからなあ。むかついてたところだったし…やっちまえ!!」

リーダーらしき不良が叫ぶと全員ミスゴロウめがけて走り出した。

ミスゴロウは一目散に奥に広がる林に逃げこんだ。

不良たちはもちろん追いかけた。ミスゴロウの罾にも気づかず…。

「…待てえ!!」「…」叫びながら追いかけていると、ミスゴロウが急に右に曲がった。

不良たちもミスゴロウが曲がった方向に走った。すると

ベシヤベシヤベシヤ!

そこはかなりぬかるんでいた。うっかりすると転びそうになるほどだ。

「わあ！な、なんだこりゃあ！」

「ああ、オレの自慢の靴が泥だらけだ！」

など言っていると、また目の前にミスゴロウがいた。

「くそお、捕まえる！！！」

リーダーらしき不良が叫ぶが、ぬかるみに足を取られ、上手く走れない。

「このお…！！！」

すると、ミスゴロウは体ごと後ろを向いた。不良たちはミスゴロウが逃げると思った。しかし、ミスゴロウは逃げず、後ろ足を引っ込めた。

「ま、まさか…！」

リーダーらしき不良は何か嫌な予感がした。そして、その予感的中することとなった…。

バシヤッ！

「うわー！」

ミスゴロウは”どろかけ”攻撃をした。

バシャツバシャツ！

「うわー！うわー！」

ミスゴロウは、不良たちが全く休める気がないと感じさせるほど、連続して”どろかけ”を放ちまくった。実際、ミスゴロウは休める気はない。

そのまま”どろかけ”を放ちまくり、不良たちは泥だらけになり、目も開けられないほどになった。

「くっ…ちくしょう…」

そしてミスゴロウは不良たちに向かって走り出し、強烈な”たいあたり”をした。

「くっくわあー！！！！」

不良たちは盛大に吹き飛ばされた。そして、地面に思い切り打ちつけられた。

「くく、くそお!」「くく」といいながら逃げていった…。

「よっしゃ!!大成功だ!」

イズミがミスゴロウの近くの木の上から降りてきた。ガッツポーズをしながら。そして、ミスゴロウも喜んでいた。

「やったなミスゴロウ!」素晴らしいながらミスゴロウを抱え上げた。これがイズミの考えた作戦。うまく不良たちをぬかるみ地帯におびき寄せ、ミスゴロウの気がすむまで”どろかけ”をして、最後に”たいあたり”を決める、という作戦だ。

「よし決めた!お前を旅に連れていく!付いてきてくれるよな?」

そう言っていると、ミスゴロウは嬉しそうに頷いた。

「じゃあニックネームをつけなきゃな。お前の名は…」

ミスゴロウはぬまっおポケモンだから…

「…よし！」又マすけ”にしよう！よろしく、又マすけ！…これからお前は、俺の仲間だ！」

そう言っているとミスゴロウ改め又マすけは頷いた…。

こうして、イズミに新しい仲間ができた。勇敢で力強い、新しい仲間が…。

それは……ぬまっおポケモン。ミズゴロウのヌマすけだ。

第3話：旅の目的、旅のスタート

夜10時半。32番道路。

そこを流れる川の近くにはイズミがいた。彼はタオルやTシャツをかけたロープが木と木を結んでいた。これから、彼は洗濯をしていたことが伺えた。

「さすがに着たのをそのままっていうのはまずいからなー」

誰にいうわけでもなく、1人呟きながら作業していた。

彼の普段の服装は白いカッターシャツを上羽織り中にTシャツを着ていて、下は黒い学生ズボンだ。つまり、中学生や高校生の学校での夏服姿だ。

なぜ3月なのにそんな服装なのかは今はまだ言えない。

しかし、彼はそれと同時に別のことを考えていた。それは…カゲすけのことだった。

「いったいどうしたんだろっつ」

そう呟きながら、今日のことを思いかえした。

新しい仲間が加わった。ミズゴロウの又マすけ。とても力強い、信頼できる仲間だ。

又マすけで、共に歩いていたり、勝負を挑んできた相手を悉く退けたりしているとキキョウシティにたどり着いた。

キキョウシティには古い造りの家が多くあり、町には『マダツモミの塔』と呼ばれる塔も建っている。それゆえ、キキョウシティは『懐かしい香りのする町』と言われている。

そのポケモンセンターで休憩している時に、イズミはあることを思い出し、カゲすけの入っているモンスターボールを取り出した。

イズミは実は、昨日の夜、つまり又マすけを池のほとりで助けた日の夜、又マすけの回復を待っていた時に、あることを考えたのだ。それは、今後の旅に関わることだ。

その時は、そのことについてまだ決めかねていたのだが、又マすけ

を仲間に加え、決めたのだ。

そして、その考えをまだカゲすけに話していなかったので今話そう
と思ったのだ。

「カゲすけー、出てきてくれ。」

そう言いながら、モンスターボールの開閉スイッチを押した。

…しかし、カゲすけは出てこない。

ポケモンがモンスターボールから出てくるには、トレーナーがボー

ルについている開閉スイッチを押せばいいが、あともうひとつ大切なことがある。

それは、ポケモンの意志だ。

トレーナーがボールについている開閉スイッチを押すのと、ポケモンがボールから出ると言うポケモンの意志が合わさることでポケモンはボールから出てくるのだ。

つまり、カゲすけがボールから出てこないのは、今カゲすけがボールから出ようと言う意志がないからだ。

その時は、カゲすけが寝ていると思ったが、それから幾度も試したが、カゲすけはボールから出てこなかったのだ。それはキキヨウシテイを出てからも変わらなかった。

洗濯を終えたイズミは、再びカゲすけの入っているボールを取り出した。

「カゲすけー」と言いながらボールの開閉スイッチを押した……。

……が、やっぱりカゲすけは出てこない。

仕方ないと思い、今日は諦め、明日またカゲすけに話そうと決め、用意しておいた寝袋に入り、寝ることにした。

「じゃあお休み。カゲすけ、ヌマすけ。」

寝袋の横に置いてある2つのボールに声をかけ、眠りについた……。

朝7時、イズミは洗濯した服などをしまい、旅を再開した。

彼は今日中には『つながりの洞窟』に入り、次の町のヒワダタウンにたどり着きたいと思っている。

彼が昨日休んだ場所から『つながりの洞窟』は少し遠い。なので、いつもより歩くペースがやや早くなっている。

その道中、幾度もカゲすけのボールの開閉スイッチを押したが、何

度やってもやっぱり出てこない。

ため息をつき、もう何度目かわからないカゲすけのボールを腰のベルトにつける行動をすると、イズミの右側の草むらがガサガサと揺れた。

イズミは身構えた。そして、その中からは……

ドンファンが現れた。

「!」

現れたドンファンは鼻息を荒くしてイズミを見て……いや、睨んでいた。

イズミはどうするべきか頭の中で高速で考えた。

「(どどどする、どどどする!?!このまま逃げても追いつかれるだろう

し、かといって、立ち向かっても勝つ保証はまったくないぞ。」

イズミは考えた。そして…

腰についている2つのボールを取り出した。

「（どうせ逃げても追いつかれる。だったら戦ったほうがいいだろうな。1対1では厳しいだろうけど、2対1でならいける！）いけえ！カゲすけ、又マすけ！！」

投げたモンスターボールは地面についた。そして、ボールからカゲすけと又マすけがでてきた。

「カゲすけ”ひのこ”、又マすけ”みずでっぼう”！！」

手をバツとドンファンに向けながら2匹に指示を出した。又マすけはすぐに”みずでっぼう”を放った。しかし…カゲすけは動かない。

「…！カゲすけ…！」

そう呼びかけてもカゲすけは何もしない。

一方攻撃されたドンファンは怒り、突進してきた。

又マすけは突っ込んで来たドンファンに飛びかかり、ドンファンの上に乗って”みずでっぼう”を浴びせたり、ドンファンの攻撃をよけたりしている。

又マすけがドンファンの相手をしているうちにイズミはカゲすけがなぜ指示を聞かないのか聞くことにした。

「カゲすけ…いったいなんで…！？」

カゲすけは鳴き声を上げたりせず、代わりに又マすけを見た。イズミはそれで理解した。なぜカゲすけは昨日からボールから出て

こなかったり、指示を聞かないのか…。

「ヌマすけが仲間に加わったのが少し気に入らないのか…？」

そう聞くと、カゲすけは俯いた。

カゲすけは”控えめ”な性格だ。たとえ気に入らないことがあってもあまり表に出さない。少しどころかかなり、なのだろう。

「……………」

イズミはカゲすけにヌマすけをどうしても受け入れて欲しかった。だから、どう言うべきか考えた。そして、ふいにカゲすけの体に合わせるようにしゃがんだ。

「カゲすけ、聞いてくれ。」

そう言いながらカゲすけを見た。カゲすけもイズミを見た。

「ヌマすけのこの前に聞いて欲しいことがある。昨日から言おうとしていたことだ。」

そこでイズミは一旦区切り、カゲすけの様子を見た。カゲすけはちやんと聞こうとしている。

それを確認し、イズミは話を続けた。

「実は一昨日から考えていたんだ。これからの旅について。ただジヨウト地方をめぐったって何か変わるわけがない。自分から何かしていかなきや何も変わらない。………」あの事”と同じことがあってもまた”あの事”と同じになってしまうよ。」

カゲすけは苦い顔をした。イズミだって”あの事”は思い出したくはない。でも今カゲすけに話さなければならぬので、イズミは耐えた。

「俺たちは…変わるべきなんだ。”あの事”の時、俺たちは何もできなかつた。俺たちが、弱かつたから。だから…」

イズミは目を閉じ、一旦言葉を止め、…そして話した。

「この旅で俺たちは…強くなろう。この地方で、1番。」

カゲすけは驚いたような顔をした。

「この旅を、俺たちの修行の旅にするんだ。強くなって強くなって、そして…」あの事”がまたあっても自分たちの力で打ち碎けるようになろう。」

これが、ヨシノシティで決めたこれからの旅のこと。そして、これから話すのは又マすけのことだ。

「カゲすけ。お前が又マすけを気に入らないのは…今まで俺の”仲間”は…俺だけだったから。だから、新しく仲間が加わるのが、嫌なんだろう？」

そう聞くとカゲすけは再び俯いた。そのとおりのようだ。

「お前の気持ちは分からなくはない。けどな…

「俺たちには新しい仲間が必要なんだ。」

カゲすけは再び驚いたような顔をした。

「あの事」は確かに俺たちが弱かったのもあるけど、あの時足りなかつたんだ。…共に戦う、”仲間”が。」

カゲすけは何かに気づいたような顔になった。

「あの時俺たちに1番必要だったのが、”仲間”だったと思うんだ。もっと仲間がいれば打ち勝ったかもしれない。……あの池で、又マすけが不良たちを打ち負かすことが出来たのは、1人じゃなかつたからだ。そう思ったから…俺は又マすけを仲間に加えたんだ。」

「俺は、俺たちは強くなろうと思う。でも、2人だけでじゃない。新しい仲間を加えて、共に強くなるべきなんだ。だから…カゲすけ。」

イズミは一旦溜め、

「ヌマスけを”仲間”として受け入れてやってくれ。…お願いだ。」
と言った。

カゲすけはまた俯いた。でも、嫌な感じじゃない。少しだけ考え、
そして…

カゲすけは頷いた。

「よし、じゃあさっそくだ。ヌマスけと協力して、あのドンファン
を倒すんだ！」

カゲすけは頷き、ドンファンに向かって突っ込んだ。すかさず、イ
ズミは指示を飛ばした。

「ヌマスけ、後退してくれ！」みずでっぼう”でカゲすけを援護す
るんだ！カゲすけ、”メタルクロー”だ！！」

ヌマすけは、カゲすけに当てないように気をつけながら”みずでっぽう”で援護し、カゲすけは体の小ささと素早さを駆使し、”メタルクロー”で攻撃する。

ドンファンとはかなりレベル差がある。だが息のあったコンビネーションでどんだんダメージを与える。

そして、

「とどめだ!!カゲすけ”ひのこ”、ヌマすけ”みずでっぽう”!
」!

HPが後少しのドンファンに一気に畳み掛けた。
どちらの技もヒットし、ドンファンは倒れた。

「やったぜ!!」

イズミは喜びの雄叫びを上げ、カゲすけとヌマすけは喜びながら飛び跳ねた。

カゲすけは大きな相手に打ち勝った。新たな仲間と、共に戦い…。

傷ついた2匹を、きずぐすりで回復させると、カゲすけは又マすけのもとに近寄った。そして、なにやら会話を始めた。カゲすけは、新たな仲間を受け入れることにしてくれたようだ。最初、又マすけはカゲすけに対し、少し怯えていたが、5分後にはもう仲良くなっていた。

「良かった良かった。カゲすけが、新しい仲間を受けいれてくれて

…。
「

仲良くじゃあっている2匹を見て、そう呟いた…。

「さあ、新たな旅の始まりだあ!!」

カゲすけとヌマすけを肩に乗せ、そう叫びながら、イズミは『つな
がりの洞窟』を目指し、かけていった……。

第3話：旅の目的、旅のスタート（後書き）

はじめまして。この『ポケットモンスターmind』を執筆している稲荷寿司です。まだ書き始めたばかりで、いい文章が書ける自信は全くないですが、応援していただけると嬉しいです。

今後はあとがきは7話ごとに書くようにします。物語の補足説明やキャラクター・ポケモンの情報などの書きます。7話ごとにあとがきも拝見していただきたいと思います。

『ポケットモンスターmind』はまだまだ序章の段階です。これからどんどん物語が動き始めます。イズミの旅も本当のスタートです。ぜひお楽しみに！！

第4話：書く集団（前書き）

更新停滞すみませんでした。

今後はしっかりと更新していきます。

なお、この話より出てくるこの『内の思考です。』

文字

』は、登場人物の脳

第4話：晝く集団

33番道路、『つながりの洞窟』出口。

そこには謎の集団がいた。

全員が全員、胸に”R”の文字が入った黒ずくめの服を着ている。

「これから、トレーナーのポケモンの捕獲作戦の開始する。全員のスパイタイプのポケモンは持っているな？」

よし、では、作戦開始だ。全員、『つながりの洞窟』に入れ。」

謎の集団は『つながりの洞窟』に入っていた
.....

つながりの洞窟。入り口から入って少し歩いた所にイズミはいた。まだ入り口から近いと言うことで、周りは少し明るい。

「さつて、早いとここを抜けようぜ。」肩に乗っているカゲすけとヌマすけにそう言った。

だがイズミは、そんな様子とは裏腹になにやら少し心配顔だった。その理由は、この洞窟に入る時に、同じく洞窟に入ろうとしているトレーナー達が話していた、気になる噂を耳にしたのだ。

『なあ、この所このつながりの洞窟で、トレーナーの手持ちポケモンが相次いで行方不明になってるらしいんだ。』

『まじかよ！？何でだ！？』

『それが一切理由がわからないんだ。聞いた所によると、洞窟の入り口が入ってから30分歩いた所あたりで、手持ちポケモンが急に微ま睡どろんだようになったかと思うと、ふらふらとどこかに歩いて行って、追いかけても急にいなくなるらしいんだ。』

『なんだよそれ…。』

『神隠しとかいろいろ噂立ってるが、結局わからないらしい。』

確かにわからないことだらけだ。何故勝手に手持ちポケモンが歩いていってしまうのか。何故いくら待っても探しても見つからないのか。何故急に微睡んだようになるのか。

結局わかることは”自分も気を付ける”と言うことだけだった。

しばらく歩いていって、イズミはその”ポケモンが行方不明になる”地帯にたどり着いた。

イズミは少し警戒しながら進んでいく。

すると、肩にいるカゲすけに異変が起きた。なんだか体がふらふら
しているのだ。

カゲすけ？と呼びながら見てみると、カゲすけは薄目になりながら
体がふらふら揺れていた。

驚いて何も言えないでいるうちに、カゲすけはイズミから飛び降り、
突然洞窟の奥への道へ歩いていく。

イズミは慌てて追いかける。カゲすけのしっぽの火で洞窟が照らさ
れていた。

その時イズミは気づいた。照らされた洞窟の奥にスリープがいるのを。そして、そのスリープがカゲすけに”さいみんじゅつ”をかけているのを。

それを見て、イズミは脅威的洞察力のもと悟った。この”手持ちポケモン行方不明事件”の真相を。

スリープは、主に草むらに生息するポケモンだ。こんな洞窟なんかにいるわけがない。当然トレーナーのポケモンということになる。そんなスリープが野生ポケモンではなく、トレーナーのポケモンに”さいみんじゅつ”をかけているのだ。しかも、明らかにバトル目的ではなく、こっちへ呼び寄せている。ということは……………？

(スリープの持ち主がポケモンを盗もうとしている!!)

そう考えたイズミは、ヌマすけに

「ヌマすけ!!」みずでっぼう”!!”

と命令した。

”みずでっぼう”は見事スリープに命中した。すると、微睡んで歩いていたカゲすけは目を覚まし、イズミのところに戻ってきた。

イズミは一度、この事件の犯人を捕まえようかと思ったが、いずれ他の誰かが気付くだろうと思い、

「とりあえず逃げよう!!」

とカゲすけとヌマスけに言った。

走り出すときに後ろを振り返った。

その時、倒れたスリープの後ろに人影が見えた。

その人影は黒ずくめで、胸に”R”の文字がついている服を着ていた……………。

「ハア、ハア、ハア…。」

何とか洞窟の外に出られたイズミは、近くの段差に座り込んだ。イズミは洞窟の中での出来事について考えた。

奴らは何が目的でトレーナーのポケモンを盗んでいるんだ…？ただ珍しいポケモンを集めているだけ、というのは考えにくい。だって、それだけのためにトレーナーから盗むなんていうリスクを冒す必要があるだろうか？

盗んだポケモンを売る、というのはあるかもしれないが、ポケモンを売れる場所はごく限られているし、警察もその線を考え、調べたそうだが、盗まれたポケモンは売られてはいなかったらしい。なのでそれもない。

じゃあ…盗んだポケモンを何かに利用するのか…？

何に利用するかなんてのは、わかるわかるわけではないけど、それで間違いないだろう。

あと、犯人は単体、ていうのはまずない。盗まれたポケモンの数はかなり多くて、だいたい50匹ぐらいらしい。この事件が始まった約2週間前で一人でこんなに
も盗めるとは思えない。間違はなく集団での犯行だろう。

そう考えた。

そしてもう一つ、イズミが気になっていること。犯人の出で立ちだ。

あの服装、チョウジタウンでも見たような……。確か、”いかりまんじゅう屋”でも出入りしてるって噂も立っていたしな。それと同じ集団か……。あるいはその一味……。いや、一味の方だな。このあたりにもあの集団がいるということは、地方規模で点在してるかな……。

しかしイズミは、これに関わる必要はないと考え、思考するのを止めた。そして、ヒワダタウンを目指して旅を続けた……。

この謎の集団の存在は、やがて自分の運命を大きく左右することになるとは、この時のイズミには知る由もなかった……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5338g/>

ポケットモンスターmind

2010年10月11日12時22分発行